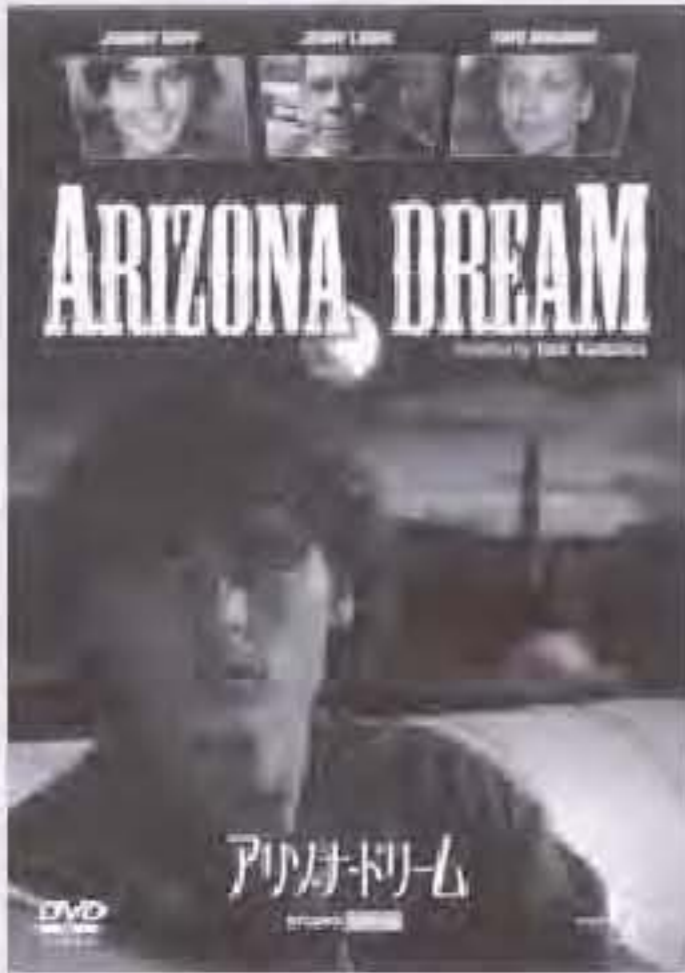


hidarimakiの  
この逸編

# アリゾナ・ドリーム



監督：エミール・クストリッツァ  
音楽：ゴラン・ブレコヴィッチ  
キャスト：ジョニー・デップ  
          ジェリー・ルイス  
          フェイ・ダナウェイ  
          ヴァイセント・ギャロ  
製作：1993年アメリカ作品  
          カラー135min  
DVD続編：ジェネオン・エンタテインメント

とぼしい海外旅行経験しかない僕が、トルコ旅行に出かけたのは98年の初頭だった。言葉が通じず道に迷い困っていた時、微かな音色が聞こえ、その曲が「in the deathcar」とわかった。その音に導かれるように歩き出すとしばらくして街路に出た。小さな楽器店のスピーカーからその曲は流れていて、僕はそこで市電を発見しやっと目的地までたどることができた。「in the deathcar」はそれを遡る4、5年前に公開された「アリゾナ・ドリーム」という映画のテーマ曲であり、歌うのはイギー・ポップだ。映画はもちろん、音楽の構成も一味違っていて、全作品をゴラン・ブレコビッチ（凄い！）が作曲している。日本では余り聞かれなかったが、僕にはお気に入りだったのでCDを買ってよく聞いていた。

旅行当時ユーゴスラビアでは民族紛争が激化し、トルコの北西バルカン半島のユーゴは臨戦体制なので身近に硝煙の匂いを感じたことを覚えている。その後ユーゴは解体し、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、

クロアチアなど複数国家が誕生。「アリゾナ・ドリーム」の監督エミール・クストリッツァ、音楽監督のゴラン・ブレコヴィッチはともにボスニアの首都サラエボの出身であり、「パパは出張中！」「アンダーグラウンド」などの作品を輩出している。「アリゾナ・ドリーム」は米国で初監督し、ベルリン映画祭で銀熊賞を受賞した。

登場する人物たちはすべてイカれている。主人公の叔父は中古自動車販売で稼ぎまくり、年若い女と結婚するため、主人公のアクセルをNYから呼び寄せる。自分の夢は月に届くまで自動車を積み上げるのだといい、いわばアメリカンドリームの体現者だ。ある日アクセルは、奇態な母娘（エレインとグレース）に会い3人の共同生活が始まる。継母であるエレインは男が好きで空を飛ぶ夢を持っている。アクセルはそんなエレインに共鳴し愛してしまう。自閉的なグレース（義娘）は主人公に興味を持ち、しかし亀になりたいと望んでいる。アクセルは、空を飛ぶ夢を持つエレインが、夢をすべて果たした叔父の存在に重なり、いつしか心を病むグレースの孤独に寄り添う気持ちになる。エレインの誕生日、アクセルは三人でアラスカに行こうと話す。しかしその夜惨劇が起こってしまう。

この映画には多様な人物像が設定され多文化性を秘めている。アメリカンドリームへの郷愁や絶望と解釈する論もあるが、僕は旧ユーゴという多民族国家の中で紛争を経験してきた監督の出自が、米国という入れ物を借り、人間個々の複雑さやあいまいさ、決して理解することがない、つまり人それぞれが異文化な存在だというメッセージとして受け取った。魚や風船をメタファーとする幻想性と、スラプスティックな笑いが冴える思い出の逸編だった。

hidarimaki



生活保護受給者を対象とし、食事や行政手続き代行などのサービスを提供し利益を得る、いわゆる「貧困ビジネス」がマスコミでも報道され、民主党は「被保護者等住居・生活サービス提供事業の業務の適正化等に関する法律案」を作った。この法案は、住居に食事などを「抱き合わせ」で提供する事業所への法規制で、悪徳業者もビビるだろうが、ホームレス支援団体にも微妙な影響を与えることになった。

野宿からの救出とは、住居を確保し、食事を提供し、医療や介護、就労などへと道案内していく支援で、無償で始めても、支援を持続させるには、生活保護費からサービス対価を得るしか方法がない。社会福祉法にもとづく救護施設も同じことをやるが、財源は公的に保障されている。しかし、とても間に合う数ではないから、ホームレス支援団体が動き、頃合いを見て悪徳業者が便乗する。まあ、ありそうなことだ。そして、政治は、社会福祉は身内だからヨイショして、悪徳業者を遅ればせながら血祭りにあげる。ホームレス支援団体は、萎縮して、社会福祉への「転業」を真剣に考え始め、残ったのは、正義の味方・社会福祉と巧妙になった悪徳業者で、支援は絡め取られ、ホームレスは肩をすぼめて、ジ・エンド。



「貧困ビジネス」の法規制という出来レース

なあんだ、出来レースだったのか？そして、ボクの、毎度お馴染みのぼやきが始まる。「法制度がないと公は動かないし、儲からないと民は動かない。しかし、法制度がなくても、儲からなくても、社会問題は解決しなければならない」。

「貧困ビジネス」、誰が言い出したのか知らないが、そもそも、ボクは、ずっと前から「ブラックマーケット」或いは「福祉の空洞化」と言ってきた。西成では、住宅扶助の4万2千円に賃貸住宅家賃が上下移動するし、最近では、個人の建て売りが4部屋ほどの賃貸にかわる「戸建改修型福祉マンション」のようなものまで登場した。

もう、これは戦場（市場）で、貧困ビジネスに社会福祉で抗するというのは、昔懐かしい非武装中立と同じ。武器を持って闘う、「社会的ビジネス」を「興す（起こす）」ということしかない。政治は、そこにこそ力を貸さないと、法律や制度は、守られるだけで、活かされない。

ホームレス支援団体も、放っておけないという「社会運動」から始まり、ホームレス自立支援法で「社会事業」も手がけ、いま、「社会的起（企）業」へとステージをあげる時なのかもしれない。

（株）ナイス代表取締役 富田一幸

